

世間はハーブブームである。カモミール、レモンクラフスなどの有名なものから、バラの花を乾かしたものと、いろいろ

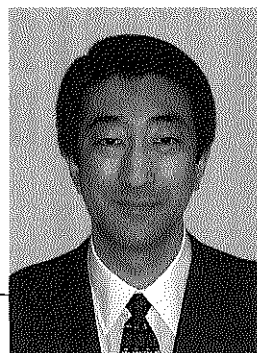
では、これら西洋ハーブと漢方薬の違いは何であるか？。それはハーブが主に単独で用いられるのに対し、漢方薬は生薬の組み合わせがその単位になっている。生薬同士

が、歴史的には薬として用いられてきた。これらハーブは主に西洋で用いられてきたものであり、今ではおしやれなお茶になっている。ドイツの生薬療法は有名であるが、修道院などで栽培され、薬として人民を救済する目的で用いられてきたのである。そうした歴史があるから、生薬を医療用として用いるのも抵抗がなかったの

が、歴史的には薬として用いられてきた。これらハーブは主に西洋で用いられてきたものであり、今ではおしやれなお茶になっている。ドイツの生薬療法は有名であるが、修道院などで栽培され、薬として人民を救済する目的で用いられてきたのである。そうした歴史があるから、生薬を医療用として用いるのも抵抗がなかったの

が、歴史的には薬として用いられてきた。これらハーブは主に西洋で用いられてきたものであり、今ではおしやれなお茶になっている。ドイツの生薬療法は有名であるが、修道院などで栽培され、薬として人民を救済する目的で用いられてきたのである。そうした歴史があるから、生薬を医療用として用いるのも抵抗がなかったの

慶應大学医学部助教授



渡辺賢治

漢方シリーズ ⑧

漢方薬とハーブはどう違うの？

いる。東西にはほぼ同時期に現れた本草書の決定的な違いは、『ギリシャ本草』では単味の生薬を基本としていたのに対し、『神農本草経』では生薬の組み合わせを基本としていることである。

本草』の分類は自然科学を重んじているのに対し、『神農本草経』の分類は、あくまでも人間に対する作用をその中心に置いていた。すなわち、365種の薬を上薬・中薬・下薬に分け、「上薬は120種あり、生命を養い、毒性がない。長期服用してもよいし、そうすべきでもある。中薬も120種あり、使い方次第で無毒にも有毒にもなる。服用に当たっては注意が必要。下薬は125種あり、有毒であるので長期間服用してはならない。寒熱の邪気を除き、胸腹部にできたしこりを破壊し、病気を治す」とある。

その序に、生薬の組み合わせに関する七つの原則を載せている。単行・相須・相使・相畏・相惡・相反・相殺がそれである。組み合わせの起源をたどれば、紀元前2世紀の蒙族の墓とされている馬王堆の漢墳墓で発見された『五十二病方』には、既に生薬の組み合わせが記載されている。生薬同士の組み合わせが、漢方の歴史のかなり早い段階で行われたものであることが分かる。詳しくは大家塚恭男著『東西生薬考』を参照されたい。

そのほか、『ギリシヤ

前の『傷寒論』をその原典としているが、生薬の構成はもちろん、その分量比まできちんと記載されている。故に古今「葛根湯」といえばこの薬、と誰もが理解できたのである。もしも名前が付かなかったら、現在このように幅広く用いられることとはなかったであろう。生薬療法の歴史は西洋でも非常に長く、紀元前後にディオスコリデスが著わした『ギリシヤ本草』の評価は高い。時を同じくして中国では『神農本草経』が著わされて

そのほか、『ギリシヤ